九州大学学術情報リポジトリ Kyushu University Institutional Repository

ハイデガー『存在と時間』における空間論: 介護実 践における共同行為に着目して

廣田,智子 山口県立大学社会福祉学部: 准教授

https://hdl.handle.net/2324/7392671

出版情報:哲学論文集. 61, pp.1-26, 2025-09-27. The Kyushu-daigaku Tetsugakukai

バージョン: 権利関係:

思われてくる。

ハイデガー『存在と時間』における空間論

――介護実践における共同行為に着目して ――

田 智 子

廣

はじめに――問題の所在

にあって現存在にとっての空間性は時間性と同じく根源的なものとしては扱われていないように見えることから、多くの注 だろうか。『存在と時間』の第二十二節から第二十四節では、私たち現存在にとって構成的な空間のあり方、すなわち空間性 が分析されている。この空間論は、著作の全体に占める分量がわずかであり、また、「存在と時間」の解明を眼目とする著作 私たちの行為の成り立ちを改めて考えると、この空間論は私たちが空間の内に住まうことの実相を明らかにしているように 目を浴びてはこなかった。たとえ論じられるにしても、身体性が欠如していると批判されるのが常である。しかしながら、 ハイデガーの空間論の不首尾を指摘する論点を検討し、必ずしも「健常」とは言い難い高齢者の行為や介護実践に着目して 私たちが空間の中で行為をするとき、空間はどのように把握されて、空間の内でどのように行為が組み立てられているの

取する」適切な行為の組み立てができること、そしてハンマーのあるところへ「方向」を定めて移動することから成る。 にハンマーを見つけてそのままでは手が届かないので椅子を踏み台にすることでハンマーを手に取るという「隔たりを-奪 例えば、壁に絵を飾るための釘を打とうと、ハンマーを探して取る行為を考えよう。この行為は、ハンマーは道具棚や工具 隔たりを-奪取する前提として、道具がそこへと帰属するべき「方域(Gegend)」が理解されている必要がある(SZ, 103)。 具棚のハンマーに「方向」を定めることで、前方の机を避けて左に回って道具棚の前へと進み道具棚の右下の空いたスペー 箱の中にあるはずで食器棚や冷蔵庫の中にあるはずではないという「方域」が先行的に理解されていること、道具棚の上部 は「隔たりの-奪取(Ent-fernung)」と「方向の切り開き(Ausrichtung)」から成る(SZ, 105)。そして、方向を切り開いて スに踏み台用の椅子を置こうといった、方向が切り開かれてくる ここで、ハイデガーが論じる現存在の空間性とはどのようなものかを、まずは簡単に確認しておきたい。 現存在の空間性 道

化することに失敗していると結論する。 別的な、各々の人に特有の中心を備えた空間性」との区別に失敗して混乱しているという。また、サーボンは、ハイデガー の空間論は本質上曖昧である「隔たりの-奪取」という観念に至っており、現存在の身体化の必然性に向き合いそれを主題 この空間論に対する代表的な批判はドレイファスによるものであり、それによれば、ハイデガーは「公共的空間」と、「個

齢者の介護実践において一般的によく知られた例とその対応方法として、事例1を次に示す。 かにするものとして読解していく。その際、介護実践における空間把握の例を用いて考察を進める。さしあたり、認知症高 以下の論述では、こうした代表的な批判の論点を吟味して、ハイデガー空間論を私たちが空間の中で生きるすがたを明ら

.事例1a] 認知症高齢者が尿意を覚えてトイレに行こうとするのだが、付近のトイレに到着できずに失敗を繰り返すこ

とがある

[事例1b]そこで介護者が、 認知症高齢者をトイレが視野に入る位置にあらかじめ誘導しておくと、 その認知症高齢者

は自力でトイレにたどり着くことができる。

論 介護実践の事例に即してハイデガー空間論を読み直すことで、介護実践における共同行為の意味を解釈して示すことも、 一の目的 の一つである 本

空間において身体の位置がどのように把握されるかを考察する。最後に、 から解釈して、身体性ではなく空間性を論じるハイデガーの考察の豊かな可能性の一端を示したい。 奪取」と物理的な「距離」との関係を明らかにする。次に、サーボンによる批判に応えるために、 論述の順序は、 まず、ドレイファスからの批判への応答として、現存在の「実存論的空間性」 介護実践の共同行為の意味をハイデガーの空間 (SZ, 56)私たちの実践上の活動 である

| 「隔たりの-奪取」と「遠隔性(近さ)」、「距離」

空間 こう。 being)」との区別が混乱していると批判する。ドレイファスがこのような批判に至るのは、 現存在の「隔たりの-奪取」と物理的な「距離」との関係を明らかにするに先立って、ドレイファスによる批判を見てお (public space)」と、「個別的な、各々の人に特有の中心を備えた空間性 先に述べたように、ドレイファスは、 ハイデガーの空間性の議論では、 (the centered spatiality of each individual human その内で人々に存在者が出会われる 本論の考えでは、 ハイデガー

ドレイファスは両者を区別していないように思われる。ドレイファスは、「近さと遠さの可能性を切り開く上で配慮が果たす

-奪取」において「近さと遠さ」と物理的な

「距離」とを区別してい

るのだが

近さと遠さ」という概念をめぐるドレイファスの解釈に問題があるからである。

ハイデガーは現存在の

「隔たりの

—3—

現存在が事物を実践的に近づけることとを、区別し損なっている」と批判する。つまり、ハイデガーの述べる「そのつど存 にとって近いということでしかありえず、公共的空間の次元ではない」として、ハイデガーが「結局、 ている。そのように理解しているので、ドレイファスは、ハイデガーの言う意味において「実践的に近づける」ことは、「私 在者を近さのうちへと出会わせる」の「近さ」を、ドレイファスは事物を距離的に近い位置にもたらすことであると理解し するための条件である、現前(隔たりの-奪取)の場としての空間を開くこと一般と、事物を取り上げ用いることにおいて うちへと出会わせる」(SZ, 105)という記述を引用して、この箇所でハイデガーが「そもそも事物が近かったり遠かったり ける「現存在は本質上と隔たりを-奪取しつつ存在しており、現存在がそれである存在者として、そのつど存在者を近さの 「特定の現存在に対する特定の道具の近さと遠さ」との区別に注意を促している。その上で、『存在と時間』にお 個別的現存在の空間

現前を存在論的に開くことでありかつ同時に個別的中心から事物への変化を伴った接近可能性」であるなら、 できるだけである」(SZ, 108) が、ここでドレイファスが「或る特定の現存在からの事物の近さや遠さ」と言うものは、ハイデガーの述べる現存在の実存 隔たりの奪取を、或る特定の現存在からの事物の近さや遠さと混同している」と誤って結論してしまう。後に検討してい 性に優位を与えている」と解釈する し、各々の現存在がそれに固有の隔たりの-奪取を自分が携えているものとして持っており、そしてこの隔たりの えず変化する) のつどの圏域の中であちこちと動き回ること(umherwandern)はできず、ただその隔たりを-奪取することを変えることが 離」と呼ぶものである。そしてドレイファスが結論の根拠として挙げるのは、「現存在は自身の隔たりを-奪取することのそ 論的構造としての「隔たりの-奪取」とは異なるものであり、本論の見解では、ハイデガーが「近さや遠さ」ではなくて「距 そうして、ドレイファスは、「近さと遠さ」と「距離」との区別を見落とすことで、ハイデガーが「実存論的構造としての 存在者的距離と、 強調はドレイファス)という文章である。ドレイファスによれば、ここでハイデガーは (変化しない)存在論的な隔たりの - 奪取とを区別しない」で混同してしまっており、 公共的空間は

して考えよう

存在しえないか、 後からの構築物になってしまうと言う。ドレイファスは 「隔たりを-奪取することを変える」を、

的な距離の変化として理解しているのである。

別がハイデガーにあっては混乱していると批判しているということである。以上の批判を踏まえて、ハイデガーの空間論に おける現存在の「隔たりの-奪取」と、「遠隔性(近さや遠さ)」と区別される物理的な「距離」との関係について検討して 的 「距離」とを混同していると見なした上で、「公共的空間」と「個別的な、各々の人に特有の中心を備えた空間性」との区 以上で確認されたのは、ドレイファスは、ハイデガーが現存在のいわば存在論的な「隔たりの-奪取」と存在者的

(一)「隔たりの―奪取」の成り立ち

として、道具がそこへと帰属するべきである「方域」が理解されている必要がある。「隔たりの-奪取」とは「さしあたりた る」(SZ, 105)。具体的には、現存在が実践において道具などの存在者へとそれが利用できるよう接近することであるとイ いていは、配視的な近づけであり、調達したり準備したり手元にもったりすることとして、近づけること(Nährung)であ メージできる。ここで「隔たりの-奪取」において「公共的」な空間理解はどのように機能しているのかを、 先に簡単に見たように、現存在の空間性は「隔たりの-奪取」と「方向の切り開き」から成り、それらが可能になる前提 事例1aに即

.事例1a」 認知症高齢者が尿意を覚えてトイレに行こうとするのだが、付近のトイレに到着できずに失敗を繰り返すこ

とがある

先の角を曲がったところにあるトイレに到着できない。その理由は、この高齢者はトイレの「場所」を分かっていないから 事例1 a では、 であると考えられる。或る道具の「場所」についてハイデガーは次のように説明する。 この高齢者は尿意があることを判断できていてトイレに行こうとしているにも関わらず、 わずか数メートル

間的位置で純粋に事物的に出来することとは原則的に区別されるべきである。そのときどきの場所は、 するのに適している特定の「あそこ」や「ここ」である。(SZ, 102) かれあっている諸々の場所の全体に基づいて、そこから規定されている。(…)場所はそのつど何らかの道具がそこに属 のその道具が占める場所として、環境世界的に道具的に存在している道具連関が占めるところの、互いに方向を切り開 道具は自身の場所 (sein Platz)をもっているか、あるいは「雑然と置かれている」かであるが、このことは、 何かをするため

見当をつけている。或るものが帰属すべき場所をハイデガーは「方域」と呼ぶ 出しや冷蔵庫の中を探してみることはまずない。つまり、私たちが或るものを探すときには、そのものが帰属すべき場所に たと思ったペンが見当たらないときに、ペン立てや鞄の中のペンケース、ノートの間を探すことはあっても、 或る道具の属する場所は、他の道具との連関から規定されているものであり、純粋な物理的な空間上の位置とは異なるとい 例えば、ペンは、筆記するための道具の連関全体において、そのあるべき場所が規定されている。私たちは机上に置い 食器棚の引き

全体性が司令される。道具としてそこに属するのに適しうるという帰属すべき場所は、配視的に気遣いつつある交渉に (…) 或る道具全体が占めるべき場所を得てそこに属するのに適していることの根底には、このことの可能性の条件とし 帰属すべき場所一般が潜んでおり、 この帰属すべき場所一般の中に入り込むことによって一つの道具連関には場所

おいて配視的に眼差しのうちにあらかじめ保たれており、こうした帰属すべき場所を私たちは方域と名づける。

或る道具があるべき場所は、私たち一般、あるいは少なくとも複数の人にとって馴染みの違和感のない配置であり、 と説明できる。現存在の「隔たりの-奪取」は、あらかじめ「公共的」な空間理解によって規定されているのである。 できる高齢者がわずか数メートル先のトイレに到着できない理由は分からない。だが、ハイデガーの空間論に従えば い。また、私たちにとって第一次的な空間理解を純粋な物理的な空間上の位置として考えると、自力で問題なく歩くことが ると、尿意を感じて動き出すという身体性は機能しているにもかかわらず目的地に到着できないことの説明がうまくできな すでに理解しているのである。そして、私たちが何かを探すときには、そのものがあり得るべき場所、すなわち方域をもと 症高齢者にはトイレのあるべき方域の見当がつかず、トイレへと接近するための適切な行為の組み立てに問題が生じている てだけではなく私たちにとって物のあるべき場所という意味での「公共の」空間のあり方を、すなわち「方域」を私たちは いくつかの場所を探してみることで、探し物を見つけ出す。事例1aでは、当人の身体を中心に行為を説明しようとす

(二)「隔たりの-奪取」における「遠隔性」の問題と距離

の三者を区別して次のように述べる 隔たりの-奪取」において、「近さと遠さ」と物理的な「距離」とはどのように現れてくるのだろうか。 ハイデガーはこ

存在は本質上隔たりを-奪取しつつ存在しており、現存在がそれである存在者として、そのつど存在者を近さのうちへ 遠隔性 (Entfernung) (近さ) (Entfernheit (Nähe)) やそれどころか距離 は現存在の世界内存在に関する現存在の一つの存在様式であり、そのような隔たりの奪取 (Abstand) のようなものとは解さない。

いからである。それら両種の存在者は単に、 がその遠隔性において現存在にとって暴露されている限りでのみ、もろもろの「隔たり」や距離が、 と出会わせる。 隔たりの-奪取が遠隔性を暴露する。 隔たりを奪取することの中で眼前に見出されて測定されることができる距 遠隔性は、 距離と同様、 現存在とされるにふさわしくない存在者 世界内部的

遠さ)」が問題となることにおいて、事物間で数量的に測定することができる「距離」が入手される。「遠隔性はとりわけ距 できる場合は、その「遠隔性(近さと遠さ)」は表立ってこない。或るものへのアクセスが上手くできず、「遠隔性 ることが必ずしも潜んでいるわけではない」(ibid.)とされており、隔たりの奪取において特に問題なく或るものにアクセス 隔性(近さ)」である。「隔たりを奪取することの中には、現存在と関連する道具的存在者の遠さ(Ferne)を表立って見積も ここで確認できるのは、「隔たりの奪取」は現存在の実存範疇であるということである。そして、「遠隔性 離」とは、現存在ではない道具や事物などの存在者の範疇的規定である。「隔たりの奪取」によってまず暴露されるのは「遠 離をもつにすぎない。(SZ, 105 たって(enfermen)いないのだが、それは、これら両種の存在者のいずれもその存在様式に従って隔てることができな 自身に即して他の世界内部的存在者に関連して入手しうるようになる。二つの点は総じて二つの事物と同様に互いに隔 の一つの範疇的規定である。これに反して隔たりの奪取は実存範疇として確保されなければならない。そもそも存在者 (近さ)」と (近さと

は、 現存在の隔たりの奪取との「相対的な関係において見積もられる」(SZ, 105) ものであるという。 数量的に測定できる「距離」とは違い、「遠隔性」はどのようなものだろうか。 遠隔性すなわち近さと遠さと

(近さと遠さ)」と「距離」とは明確に区別されている

離とは決して解されない」(ibid.)として、「遠隔性

遠隔性は、 さしあたっては「公的 (amtlich)」に計算された尺度が熟知されている場合でも、 配視的に見積もられてい その人には無限に長い

に即して言えば、

なぜその高齢者がトイレに到着できないのか、どうすればトイレに到着できるようになるかを

と思われるからである」(ibid.)とも述べられる通りである。

るか、

である。

それを考える中で、

場合によっては、

高齢者が自力で歩けるのはトイレまでの数メートルよりも短い距離な

考えるときには

まず遠隔性が考えられている。

その高齢者とトイレとの

)間に埋

一めなけ

n

ばならないどのような隔たりが

識は (…) 事物的に存在する諸 環境世界を配視的に暴露し近づける機能をもってはいない。 「界へと配慮的に気遣いつつ関わっていることにおいてのみであり、 前者は精密に知られているかもしれないが、それにも関わらずそうした知識は盲目にとどまり、 々 への事物 の客観的な距離は、 世界内部的な諸 人がそうした知識を利用するのも、 またそのように関わっていることにとっての 々の道具的存在者の遠隔性や近さとは その人に

そのように関わっているときには道のりは測定されることはない。(SZ, 106)

れる。 には長い道も「客観的」にはきわめて短い道よりも一層短いことがあるが、それは、 学図書館で図書貸し出しの手続きを踏む方が、 隣にある教員の研究室までは距離にしておよそ一メートルであるとする。 遠 た当のものにアクセスする際に埋めなければならない隔たりのことである。それは、数量化できる「距離」 隔性 る建物の あるいは直接研究室に行ってみて教員に事情を説明して研究書を貸してくれるよう頼むよりも、 遠隔性はこのように、 へとアクセスするにあたって数量化することのできない、 或る教室から別の建物にある大学図書館は距離にしておよそ二百メートル、 或る研究書を借りたい場合を例に考えてみよう。 距離も一つの要素として考慮することはあるがそれに尽きるものではなく、 教員にメールをして研究書貸出の許可を得てから約束の日時に研究室を訪れ その研究書は大学図書館と教員の研究室とにあり、 いわば質的な近さ・遠さをも含む概念である。 この研究書を入手しようと、二百メートル 後者の短い道がおそらくは 自身が現在いる建物の或る教室か はるかに近道に感じら 配慮的に気遣わ 自 先の 或 n 大

はないかといったふうに、客観的で数量的に測定できる距離が考慮されうる。 のではないか、 歩くことに問題はないがトイレまでの廊下にある何センチメートル以上の段差を超えることができないので

埋めるために、 区別されている。 を指摘しているが、現存在の実践上の関心に相関的である「遠隔性(近さと遠さ)」と客観的で物理的な「距離」とは明確に りの奪取」において或るものとの隔たりをどのように埋めるかという「遠隔性(近さと遠さ)」が考えられていく。 共的空間」に対して「個別的な、各々の人に特有の中心を備えた空間性」を優先しているということはない。そして、 する「隔たりの奪取」はそもそも「方域」によって規定されているので、ドレイファスの批判するように、ハイデガーは「公 「隔たりの奪取」と「遠隔性」、「距離」とがどのようなものかが明らかになった。或るものにアクセスしようと 客観的で数量的な「距離」が測定されることがある。ドレイファスは存在者的距離と存在論的態度との混同 隔たりを

実践上の活動空間における「あそこ」「ここ」の区別と身体

体化の必然性に向き合うこと、ましてや主題化することに失敗している」と批判している。サーボンの批判は次のようなも る) よりも、 してハイデガーは道具的存在者の公共的現れを、「より身体的な方法で従事すること(手を伸ばす、 現存在の空間性において、自身の身体の位置はどのように把握されるのだろうか。サーボンは、「ハイデガーが現存在の身 彼の理解では、 より心理的で認知的な術語 (proximity) からも切り離された(あるいは切り離しうる)近接性の観念」が基礎的なものとされている。そ 隔たりの-奪取は「本質上曖昧なかたちで空間的であるだけ」の観念であり、 (気づく、注意を払う、念頭におく)で」第一次的には特徴づけている。 握る、 操作する、 かなるかたちの しかし

惑を表現している

に近い 時に、 は、 サーボンの見るところでは、 る」と述べる。「私たちが共に同じもののことを考えていたら、そのものに私たちは等しく近いのか」、「もし私たち二人が同 を払っているからだけでなく、これら各々の「距離 指標性を超えてしまい、「ドレイファスが憂慮するように、 をおくハイデガーの説明」では、「近さ」についての現存在の注意 か、そして、同じでないとすればどちらがより基礎的であるのかは、不明瞭である。この「隔たりの-「私にとって近いものはあなたにとって近いものとは異なっており、それは、私たちの各々は認知的に異なるものに注意 のか 概念の不明瞭さは、 通りの向こう側に共通の友人を見つけたとすれば、その友人は私たちの足下の舗道よりも同じ程度に私たちそれぞれ (もしあなたがヒールを履いていたとすればどうなるのか)」と問い、 「認知的な意味で私がその中に、あるいはそのもとに没入しているものへの注意という術語 どのような意味でこれら身体的な「近接性」と心理的な (distance)」は空間的なものとして公共的に接近可能ではないからであ 空間の公共的性格を脅かしてしまう」と言う。 (配慮) と相関的であるという「個人的な性質」が単なる 「近接性」 「近接性」とは同じ近さという意味な の概念が不明瞭であることの困 奪取] そしてサーボ における「近

他方ではハイデガーの言うところの「距離」 ここから分かるのは、 本論の見るところでは、一つには、 サーボ シは 「近接性」や ドレイファスと同様に「隔たりの-奪取」と のことを理解しているということである。サーボンの「近接性」 「近さ」ということで、一方ではハイデガーの言うところの 「遠隔性 (近さと遠さ)」、 概念をめぐる

あると考えている。 を十分に区別しないまま、 の区別を十分に理解していないことに由来する。この区別についてはすでに論じたので、ここでは省略する もう一つ、現存在の空間性を理解する際にサーボンが誤解している点がある。 ここでサーボンは、 両者の「近接性 「近接性」とは配慮されている存在者と (ある意味での「近さ」)」は現存在の実践上の関心に応じて変わる曖昧なもの 例としてサーボンは、 私 サーボンは との 「距離」 遠隔性 のことであり、 (近さ)」 離と

離」の捉え方が「私」の実践上の関心によって変わると考えている。

カリフォルニアにいる誰かにサー

別を正しく理解しておらず、それでは配慮されている存在者と私の身体との距離を精確に捉えられないために、 るように思われる ボンが働くウエストバージニアのモーガンタウンにある大学と彼が住んでいるところについての話をするなら、 隔たりの奪取において問題になっているのは距離だけではなく遠隔性でもあるのだが、サーボンは両者の区 その品物は「はるばるモーガンタウンに(all the way in Morgantown)」あることを指摘するかもしれない (not far at all)」と言うかもしれないが、しかし息子になぜその日に欲しいものを手に入れられないか 困惑してい

ありかつ同時に個別的中心から事物への変化を伴った接近可能性」を携えておりかつそれを変えることができることを意味 変化として理解している。その背景には、現存在の隔たりの-奪取を変えるとは、現存在が「現前を存在論的に開くことで の-奪取」を混同していると述べていた。ドレイファスは「隔たりを-奪取することを変える」ことを、存在者的な距離の ドレイファス)という文章をもとに、ハイデガーが「(絶えず変化する)存在者的距離と、(変化しない)存在論的な隔たり していると解しているのである。ドレイファスは前提として、隔たりの-奪取とは「特定の現存在が道具と交渉する際に携 あちこちと動き回ることはできず、ただその隔たりを – 奪取することを変えることができるだけである」(SZ, 108) 先に触れておいたが、ドレイファスは、 ハイデガーの「現存在は自身の隔たりを-奪取することのそのつどの圏域 の中で

という現存在との接近可能性のみを扱うものではなく、また、「私」あるいは い。さらに言えば、ハイデガーの空間論はむしろ、「私」の身体を中心に据えた現存在の活動圏域の現れを論じているのでは 論者が思うに、 利点があるように思われる。そこで、現存在の空間性とは果たして「私」 隔たりの奪取によって明らかになる現存在の空間性は、 「私の身体」を必ずしも中心とするものでもな 配慮の対象となる存在者と「私」 の身体を「中心」に構造化

えている、実践上の活動の自己中心的圏域」と考えている。

されるものであるのかを考察して、ハイデガー空間論の利点と思われるものを明らかにしよう。

ternungen)°

(一) 実践上の活動空間において「中心」にあるもの

で「中心」になっているものは何であろうか。すなわち、現存在の隔たりの奪取を規制するものは何であろうか。 私たちの実践上の活動空間において或る存在者へ接近しようとして、その存在者との隔たりを埋めようとするとき、そこ

べる。 そしてこの遠隔性 うした歩行の際に二十歩の「隔たり」で「街路上」で出会う知人よりも、 在的なものであるかのように思われ、足の裏といういわば特定の肉体部位に沿ってずれ動く。それにも関わらず街路は、そ ·歩行している際に街路は一歩ごとに触れられており、一見するとそもそも道具的に存在しているものの内で最も近く最も実 ハイデガーは現存在の隔たりの奪取において最も近くにあるものは、距離的に近い位置にあるものではないと注意を促す。 (近さと遠さ) にとって決定的なのは、 配慮的な気遣いがそのもとに留まっている当の存在者であると述 ずっと隔たって(entfernt)いる」と(SZ, 107)。

であり、 な配慮的気遣いである。この配視的な配慮的気遣いが初めからそのもとに引き留まっている当のものが、 環境世界的にさしあたり道具的に存在しているものの近さと遠さ(Nähe und Ferne)に関して決定を下すのは、 隔たりの奪取を規制している(Das, wobei dieses im Vorhinein sich aufhält, ist das Nächste und regelt die Ent 配視的

うちでそのつどさしあたって出会われる当のものへと定位されている」(SZ, 107) つまり、二十歩先の距離にいる知人に挨拶をしようと考えている現存在にとっては、関心の的となっている「最も近いもの」 はその知人であり、 「それが隔たりの奪取を規制している。「近づけは、身体をもった自我事物へではなく (…) のである。 そして、 その知人へと定位し 世界内存在の

て知人との隔たりを埋める際に、特に支障をきたさない限り、現存在に足元で接しており距離的には最も近い位置にある街

味しているのは、身体の何らかの一点から最小の距離しか隔たっていない或る空間上の位置(Raumstelle)に或るものを固 路には全く注意は払われない。「現存在が配慮的な気遣いにおいて或るものを自身の近さへもたらすときには、このことが意 してそれとの隔たりをいかに埋めるかを構造化するものであり、「私」を、あるいは「私」の身体の空間上の位置を中心に据 定するということではない」(SZ, 107)。つまり、現存在の空間性である隔たりの奪取は、 配慮の対象である存在者を中心と

事物への変化しつつある距離が変わるかのように、隔たりの-奪取と距離とを混同してしまっていると非難する。ドレイファ ら事物への変化を伴った接近可能性」とすれば、ハイデガーは隔たりの-奪取を変化させることで個別的現存在から特定の ことであろうか。これについてドレイファスは、「特定の現存在が道具と交渉する際に携えている、実践上の活動の自己中心 的圏域」を変化させることであると解釈し、隔たりの-奪取が「現前を存在論的に開くことでありかつ同時に個別的中心か それでは、ドレイファスによるハイデガー批判の典拠となっていた「隔たりを-奪取することを変える」とはどのような

スがこの批判をする上で典拠とする箇所について、改めてハイデガーの論述を確認しておこう。

に出会われる存在者に絶えず隔たりを奪取しつつ態度を取る(sich verhalten)というふうに空間的である。(SZ, 108、強 ることができるだけである。現存在は配視的に空間を暴露するという仕方で空間的にあり、しかも、そのように空間的 を-奪取することのそのつどの圏域の中であちこちと動き回ることはできず、ただその隔たりを-奪取することを変え に携えており、それは現存在が本質的に隔たりの-奪取であり、すなわち空間的だからである。現存在は自身の隔たり 取を現存在は決して横切りきった(durchkreuzt haben)ことがないどころか、それを現存在はむしろ共に携えており常 まり道具的存在者の現存在からの遠さを現存在は決して横切る(kreuzen)ことはできない。(…) 自身の隔たりの 現存在は世界内存在として本質的に隔たりを-奪取することの内に自身を保持している。こうした隔たりの-奪取、 つ

ても全く異なる相貌で立ち現れるのである。

案件に定位した隔たりの-奪取に変わっている。 とを思い出して部屋に戻るとする。ここで、当初は自動販売機の水によって規制されていた隔たりの-奪取は、 休憩中に水を買いに自動販売機に行こうと思い、 せるということではなく、 述べる文脈である。ここで「隔たりの-奪取を変えることができる」とは現存在が自身を中心として事物との距離を変化さ レイファスが混乱と指摘した箇所は、 隔たりの -奪取を規制する配慮的に気遣われた当のものを変えるということなのである。 それへと態度を取るものを変える、 自動販売機へと至る道筋を歩むが、ふと即座に対応すべき案件があったこ すなわち隔たりの 1 奪取の規制を変えることを 対応すべき

践上の 構造化されるものではないのである。例えば、 イン会議に参加するとき、 造作に置かれた本や書類は気にならず、 奪取とは、 現存在の隔たりの奪取は、 このように 隔たりの奪取を規制する当のものがあるべき場所は公共的にあらかじめ理解されていたことを思い起こしても、 関心に応じて、 配慮の対象であるものを中心として現存在の活動空間を開くものであり、 現存在 何へアクセスしようと定位するか、すなわち、 の空間性は、 他の参加者の目にどう映るかと、机上の雑然とした様や壁のカレンダー類が急に気になりはじめ 配慮の対象となっている存在者に定位しそれを「中心」とするものである。 配慮の 自身のすぐそばの壁が意識に上ることはまずない。 対象 或る部屋でパソコンを使って旅先の情報を調べているとき、 (旅先の情報とオンライン会議) に応じて、 隔たりの奪取を規制する当のものを変えることはでき 必ずしも「私」の身体を「中 しかし、 物理的には同 その同じ部屋でオンラ 現存在は自 目の前の机に の空間であっ 隔たり 心に 身の

実

(二)「ここ」という場所的な規定と自身の身体

はなく、現存在がそのもとに配慮的な気遣いとして滞在している、道具的な世界のあそこ(Dort)から内-存在としての自 を表立ってここ – 自我(Ich-hier)として見なすときですら、場所的な人称規定(örtliche Personbestimmung)は現存在の実 関わろうとする存在者が見出され、その後に自ら自身が把握されるのである。それは身体も同様である。「現存在が自ら自身 だろうか。「現存在が「自ら自身」をさしあたり見出すのは、現存在が従事し使用し期待し防止するところのものにおいて 身を理解している」(SZ, 119)と言われるように、現存在の空間性において第一に発見されそれへと定位されているのは、現 存論的空間性から理解されなければならない。(…)このここ-自我は、自我事物という一つの際立った点のことを指すので 在は、まず自身を出発点として、次に自身が関わろうとするところのものを見出すのではない。事態は逆で、第一に自身が 自身の身体を必ずしも中心とせずに構造化される現存在の空間性において、「私」の身体の位置はどのように把握されるの · さしあたり配慮的に気遣われた環境世界的な道具的存在者においてである」(SZ, 119) と述べられている。つまり、現存

定されているのではない。このことを、事例をもとに考えよう。 現存在が自身の身体的位置を「ここ」と発言していたとしても、現存在の空間性が第一に「私」の身体の「ここ」から規

存在の配慮の対象である存在者であり、自身及び自身の身体はそれから派生的に見出されて位置付けられる.

ことがある [事例1a] 認知症高齢者が尿意を覚えてトイレに行こうとするのだが、付近のトイレに到着できずに失敗を繰り返す

は自力でトイレにたどり着くことができる [事例1b] そこで介護者が、 認知症高齢者をトイレが視野に入る位置にあらかじめ誘導しておくと、その認知症高齢者

事例 にいる認知症高齢者がどうすれば「あそこ」に至れるのか、 るのはトイレのある「あそこ」であり、「ここ」が私の身体の空間上の位置を指すわけでもない。 レに到着できないのかを疑問に思う。ここでの遠ざかりの-奪取は、「あそこ」のトイレに定位した上で、「そこ」(「ここ」) (1aが見られるとき、介護者である私は、「そこ」(あるいは「ここ」) 隔たりを埋めようと考える。この場面で第一に関心となってい にいる認知症高齢者がどうして「あそこ」のトイ そればかりではなく、介護

者である私の空間上の位置は問題になっておらず、私の身体がどこにあっても構わない。

と認知症高齢者はトイレの場所がわからないので到着できていないのかもしれないと思い至る。そうすると、「あそこ」に ば、「そこ」に座席を移しておけば認知症高齢者は然るべきときに自分でトイレに行くことができるかもしれないと考え、私 る「ここ」に定め、 知症高齢者が至ることができるためにあらかじめ誘導しておくべき場所を、 イレまでなぜ行くことができないのかと、「そこ」にいる認知症高齢者に空間がどのように見えているかを確かめるために、 が「そこ」へと身体を移してみるかもしれない。しばらくして歩行の問題ではないことが判明すると、次は、「あそこ」のト 介護者である私は「そこ」に自分の身を置き移す。すると、「あそこ」のトイレは「ここ」からは見えないので、もしかする その上で、「あそこ」のトイレまでは「ここ」にいる認知症高齢者には距離が遠すぎて歩けないのかもしれないと考えれ 認知症高齢者の座席を「そこ」から「ここ」へと移す (事例1b)。 トイレが視野に入りかつ居心地のよい空間であ

明確化していない状態や、「あそこ」と「そこ」「ここ」と自身の身体の位置との関係の変化についても説明可能であ 空間把握とを統一的に説明できないのだが、ハイデガーの空間論は必ずしも私の身体の位置を起点として空間把握の説明を いは「そこ」)との しなくともよいものである。それゆえ、事例1bを、 そもそも、 身体を起点として事例1bの行為を捉えると、認知症高齢者のトイレへの移動という行為と、 トイレに定位した隔たりの-奪取において「ここ」とは、 「隔たりを埋める」行為をしていると説明できる。そして、私の身体の位置や「ここ」 介護者がトイレのある「あそこ」と認知症高齢者のいる「ここ」 トイレとそれの近くにいる認知症高齢者の空間 別の身体を生きる介護者の が何を指すの 上の

かれており、その空間においてどこを「あそこ」としてどこを「ここ」とするかは変容しうるものであり、また「あそこ」 と「ここ」の範囲はどこまで及ぶのかはそのつど自由に伸び広げられるものである。ハイデガーの次の表現は、この次第を うつした私の身体を含む場合もある。現存在の空間性において、「あそこ」や「ここ」は配慮的に気遣われた対象をもとに開 位置を含む範囲を指すこともあれば、 認知症高齢者の空間上の位置だけを指す場合もあり、認知症高齢者に自身の身を置き

記述しているように思われる。

とを (sich) 実存論的な空間性において指している。(SZ, 120) 「ここ」と発言しつつ、自らの世界へと没入している現存在は自らの方に向かって(auf sich zu)いるのではなく、そう ではなく自身から離れて(von sich weg)配視的な道具的存在者の「あそこ」へ向かっており、そしてそれでも自身のこ

このように、多くの場合は自身の身体を含む空間上の位置を意味する「ここ」は、「あそこ」の配慮的存在者の対象に定位す るのである 自身の関心がそのもとにある「あそこ」を中心としてそれに関係する人や物が「そこ」や「ここ」に空間的に開示されてく ることによって規定されてくる。私たちは、必ず「ここ」の自身の身体を中心として空間把握を行なっているのではなく、

(三)「空間を許容すること」――「身の置き所がない」という感覚

意味してはいない、ということである。ハイデガーは「「ここの私(Ich-Hier)」の「ここ」は、あそこへと隔たりを奪取し つつ方向を切り開きつつ配慮的に気遣いつつ関わる存在という意味において、常に道具的に存在する「あそこ」から理解さ 上述のことから分かるのは、私たちにあっては、自身の身体の空間的位置が直ちに「ここが自分の居場所である」ことを によってまずは規定されていると考えられる

上 れている」 て手がかりとしたいのは、ハイデガーの次の叙述である。 は位置しているのだが、「ここ」には自身の身の置き所がない、 自身の位置するはずの「ここ」が成立しない可能性を示唆していると思われる。 (SZ, 132)と言う。このことは、「あそこ」にある配慮的存在者のもとに留まってそれに親しんでいることができ 自分の居場所ではないという状態がありうる。 つまり、 自分は「ここ」に空間

する。 慮的に気遣われた道具全体の圏域の、 きどきの現事実的な状態ないし状況におけるここ(Hier)は決して空間上の位置を意味するのではなく、 れた空間 現存在は時間性として自身の存在において脱自的 (ein eingeräumter Raum)を携えることができる。この脱自的に取り入れられた空間に関して言えば、 方向の切り開きと隔たりの-奪取において開かれた活動空間 - 地平的であるので、 現存在は現事実的に絶えず何らかの場を許容さ (Spielraum) を意味

方向 私が「ここ」で「あそこ」の人や「そこ」の物と共にすごす現存在の活動空間は、 の圏域における、 そうした活動空間が現に開かれてこそ、「ここ」や「あそこ」といった区別が可能にもなる。そして、この活動空間は .の切り開きと隔たりの-奪取において開かれるので、現存在がそのもとに留まっている「配慮的に気遣われた存在者. 配視的な配慮的気遣いが初めからそのもとに引き留まっている当のものと親しんでいることから、 最も身近に配慮的に気遣われた道具全体 開かれ

は、 存在がそのもとにあるところ(Wobei)」を指していると言う イデガーは、「自身のここ(Hier)を現存在は環境世界的なあそこ(Dort) 一或る事物的存在者のどこか (W_0) ではなく、 隔たりの - 奪取と一緒になって隔たりを - 奪取しつつ何々のもとにある (SZ, 107)。現存在はさしあたりたいていは、 から理解している」と述べ、この「ここ」と 配慮的に気遣わ

からない場合には、 れ 共に自身がいる活動空間が開かれることも、「あそこ」から自身の「ここ」へと帰来することもできない、とも考えられるだ わる存在をあそこに道具的に存在しているものの方から解釈する」という仕方において帰来することである(SZ, 107f.)。そ た何かの「もと」に存在している。現存在は自身の空間性に応じて、「さしあたり決してここではなくあそこに存在してお そのあそこから現存在は自身のここへと帰来する」のであり、これは「現存在が自身の配慮的に気遣いつつ何々へと関 現存在が辺りに何らの馴染みのものも見出すことができず、目の前の存在者にどう近づいてよいかもわ つまり、 何かの「もとに」存在することができない場合に、 隔たりの-奪取が定位すべき「あそこ」と

介護施設での取り組みに、「居場所づくり」がある。入居する認知症高齢者に、活動に参加してもらおうと興味のありそう

のあった位置にはその高齢者の生まれ育った家屋はもはや実在しないことも多く、 に滞在することを思い浮かべられるのが、 紀以上も前に父母のもとで幼少期を過ごしていた実家へと方向を定めて帰ろうとする。 がその内部に居る介護施設の空間に馴染みがなく親しみをもてないとき、認知症高齢者は「ここには私の居場所がない」と そこ」から自身を理解していると思わせるものである。現在は介護施設で暮らしているのだがそのことが認知できず、 歌謡曲を皆で歌ったりする。こうした取り組みがなされる背景の一つに、認知症高齢者によく見られる言動がある。 なレクリエーションを用意したり、タオルを畳むなどの役割を担ってもらったり、 を見出し定位しようとするが目の前の空間にそれを見出せず、例えば、 言う。この発言においては、 のことは、認知症高齢者が自身の身体が位置する空間を「ここ」と捉えているのではなく、自身の関心がそのもとにある「あ 入所する施設を「自分の居場所ではない」と感じて、自分の居るべき場所を探してその場を離れようとすることである。こ 自身の身体の空間上の位置が「ここ」とは捉えられていない。そうして、どこかに配慮の対象 生まれ育った家族に囲まれて過ごした団欒の日々なのであろう。 もはや現実には実在しないが記憶の中にある そのかつての所在位置が不明なこともあ 認知症高齢者たちの往時のお気に入りの 馴染みの場所として自身がそのもと だが、 自身

以上から、

どこにも定位すべき「あそこ」を見出せず、自身の身の置き場がないので、この空間的位置ではない「どこか」に行こうと り、「父母と共に暮らす実家」への隔たりが実際に埋められることはない。 して「徘徊」する。 認知症高齢者にはこのような言動が見られることが少なくないため、 けれども、自身の身体が現在ある空間的位置には 介護者たちは、 認知症高齢者がそ

のもとで親しみ滞在することができるものを必死で考えて、準備するのである。

挙にいとまがない。例えば、クラスに溶け込んでいない児童・生徒が、教室に近づくと心身の不調をきたすようになり、 の居場所を得ていると感じられるかは、 きないのである。 室空間に入ることができなくなる。 身の場所を見出すことができない例は、認知症高齢者のみに見出されるわけではなく、身近な場面を思い浮かべてみても枚 もとで見出せなければ、そこが自分のいる場所としては把握されず、言うなれば、そこに自分の「場を許容すること」 自身の関心がそのもとにある「あそこ」から自身の場所が規定されている、 私たち現存在が空間の中で住まうことにおいて、 物理的に自分が位置することができるスペースはあっても、 別の事柄である 物理的な空間上の位置の問題と、 ないし「あそこ」にうまく親しみをもてず自 自分の馴染みのものがその 私たちがその内で自ら が

親しみ配慮の対象とする存在者の圏域から現存在の活動空間が切り開かれており、 こ」「ここ」といった区別が可能になることが明らかになった. その活動空間において「あそこ」や「そ

現存在の空間性は「私」あるいは「私の身体」を中心として組織化されるのではなく、むしろ現存在がそれと

示す うな現存在とされるにふさわしくない存在様式をもつ存在者に属する「範疇 私たちは空間の内に住まっている。 実存範疇 (ein Existenzial)」であるということはよく知られている。この「内」について、次のように述べられてい 世界内存在の 「内存在」は、 事物的存在者が空間の内部に事物的に存在するというよ (Kategorie)」ではなく、 現存在の存在体制

る。

教

22 —

で住んでいる、滞在している(ich wohne, halte mich auf bei ... der Welt, als dem so und so Vertrauten)、ということであ 「もとで」(bei)と関連があり、「私はある」(ich bin)はまた、私はしかじかに親しまれているものとしての世界のもと 何々と親しんでいる(vertraut mit)、私は或ることを手がけているという意味である。(…)「ある」(bin)という表現は は innan- に由来し、これは住む、 居住スル、滞在するということであり、「で」(an)は、私は慣れている、

る。 意図的にあるいは意図しないままに、(或る特定の)人々がそのもとに滞在できないような空間作りがなされていることもあ 私たちは或る空間の中で、何かのもとで親しんで滞在できることもあれば、居場所がなく身の縮むような感覚をもつことも ハイデガーの空間論は、「私」の身体を中心に据えた現存在の活動圏域の現れを論じているのではないが、それが却っ 人々が安心してその場に住まうことができるように気を配ることもあれば、「排除アート」などに象徴されるように、

おわりに ―― 本来性と非本来性の選択を可能にする世界との親密性

私たちが空間の内に住まうとはどのようなことかの一端を鮮やかに切り取ってくれるように思う。

に尽力する。 のとして解釈できるだろうか。よく知られているように、『存在と時間』では他者に対する「顧慮的な気遣い」について、二 つの可能性が示されている(SZ, 122)。第一のいわば非本来的な「代理し支配する(einspringend-beherrschend) 事例1や居場所づくりといった介護実践における共同行為を「気遣い」の観点から分析すると、どのような意味をもつも 特定の他者から「気遣い」を奪い取って、その他者に代わって配慮的な気遣いの内に身を置き、 この顧慮的な気遣いは、 配慮的に気遣われるべき当のことをその他者に代わって引き受ける。 第二のいわば本 その他者のため

で当人がトイレに自力で行けるようにするというものの他に、 来的な「手本を示し解放する ているので「代理し支配する顧慮的な気遣い」であると解することができるが、1bは当人自身がトイレに自力で行けるよ れる(1b)。これら1bと1bの可能性を先の顧慮の二つの可能性に対応させると、1bは他者に代わって排泄の対応をし が取りうる顧慮の具体的な可能性は、 者に「気遣い」を気遣いとして本来的に返すものである。 他者が実存的に存在しうるという点でその他者に手本を示す。これは他者から「気遣い」を奪い取るのではなく、 (vorspringend-befreiend) 1bのようにトイレが視野に入る位置にあらかじめ認知症高齢者を誘導しておくこと 顧慮的な気遣い」 先の例を再び用い 失禁してもよいようにオムツを着用してもらうことが考えら は、特定の他者のために尽力するというよりは、そ れば、 事例 1 a の事態が見られたときに介護者

できるようになるのは、 ものにすぎない」(SZ, 179)と言われるが、 へと現存在が喪失されているという性格をもつ(SZ, 175)。そうしたあり方から現存在が本来性と非本来性との選択の前 気遣われた「世界」のもとに存在しているということ」「何かのもとに没入していること」を意味し、多くは、 うにと当人自身に気遣いを返そうとしていると解することもできるように思われる。 の「もとに」存在することができ、 立たされるのは、不安において世界との「日常的な親密さ(Vertrautheit)」(SZ, 189) 遣いがとどまることができる、存在者へ」と頽落している(SZ, 189)。頽落とは、「現存在がさしあたりたいていは配 なされるものだからである。現存在は日常において、「世人へと喪失して、安らぎを得た親密さの中でそのもとに配慮的 来的な顧慮的気遣いは、 しかしながら、 落しつつある日常性の上に浮動しているものではなく、 事例1bの行為を本来的な顧慮的気遣いとして解釈することは、 当の現存在自身が本来性と非本来性との選択の前に立つこと、 現事実的に頽落しつつ実存することという意味での気遣いとしてのみである」(SZ, 367) とも述べ 日常的な親密さが成り立っていることを前提としている。 言い換えれば、本来性と非本来性との選択の前に立つことができるのは 実存論的には、 そうした日常性が変容されて掴み取 論者にはためらわれる。 が崩れるときである。「(…) 本来的 あるいは本来的な選択をするように 「現存在が空間 質的に存 一世人の公共性 は な気 本

なく、それぞれの文脈の中では一定の意味において大変重要で意義のあることでもあり、また必要なことでもある。 本を示すという選択を取ることもある。これらは自覚的になされることもあれば無自覚になされることもあり、言うまでも わりに対応したり、自身の入所する施設から出て「徘徊してしまう」ときに、施設の外に出ないようにしたりする選択を取 られているが、 あるとき、「当たり前」とされており多くの「健常な」人にとってはほとんど意識にも上らない事柄 もつと思われる。 て「日常性」は、 しているように見える。そうであるとすれば、介護実践における認知症高齢者へのケアは、本来的顧慮でも非本来的顧慮で 当の現存在が共同現存在として日常性を生きるすがたであると解釈できるのではないだろうか。 別の可能性もある。それは、或る現存在が日常的に世界との親密さを得て何かのもとに滞在することに困難が また、私たちが世間的に理想とされる事柄を無批判に受け入れて、その理想に当人が合わせられるように手 先の介護実践で示された認知症高齢者は、 本来性ではないという消極的な意味もあれば、本来性あるいは非本来性を下支えしているという意味をも 私たちは、 或る現存在が近くのトイレに到着できないときに、それを「当人の失敗」と見なして誰 私たちが空間の内で何かのもとに親しんで住まうことの実相を示 (例えば、人々の振る舞 私たちの生にあっ だが、

に親しみ自らの活動空間の が見つからないときには いる状況から改めて選択を選択し直すことであろう。そして、空間の中に何ら自分がそのもとに親しんで滞在できる存在者 組み立てるかのように思っているが、実際には、本来的に自己が何かを選択するとは、すでに与えられた空間の中で日常的 |健常な」私たちは、自己の主体的な選択や「自立」と言えば、自分の身体をもとに空間における行為を主体的で自発的 『存在と時間』における現存在の空間性をめぐる論は、確かに身体に定位して身体を主題化するものではないが、暗黙理 例えば、 「勝手がわかる そうした空間を規定する存在者の連関全体のあり方を問題にするということも考えられ (auskennen)」(SZ, 354) ことにおいて、 何らかの選択をすでに生きてしまって

い方や空間のあり方、

集団の仕組みなど)を、改めて問い直し、各々の現存在が居場所を得て何かのもとで住まうことがで

さない るものと思われる。私たちが空間の内に住まうあり方を明らかにすることは、「ひと」の平均的なものからはみ出すことを許 に「健常」な心身を前提することなく、空間に親しんでその中を生きる私たちの具体的有り様や可能性を明らかにしてくれ 「平均的日常性」の支配が宿す暴力的な一面を、 私たちが問題として問うことを可能にしてくれるのではないだろう

註

か。

- $\widehat{1}$ M. Heidegger, Sein und Zeit, Max Niemeyer Verlag, 18. Auflage, 2001, 1. Auflage, 1927. 以下では略号を SZ とし、その後にページ数 を記す。なお、特に断りのない限り、引用文中の強調は原著者による。
- 2 村田はハイデガーの論じる現存在の「空間性」を、物体的存在をモデルとした空間理解に代わる、「生きられた空間性」として解 釈して呈示している。村田純一「意識の世界内存在と空間性 ――フッサール、ハイデガー、ギブソン」、門脇俊介・信原幸弘編
- (3) H. L. Dreyfus, H. L. Dreyfus, Being-in-the-World: A Commentary on Heidegger's Being and Time, Division I, MIT Press, 1991.(「世界内存 在 『存在と時間』における日常性の解釈学』門脇俊介監訳、 産業図書、 二〇〇二年。)

『ハイデガーと認知科学』、産業図書、二〇〇二年、一二一 - 一四八頁。

- (4) D. R. Cerbone, Heidegger on Space and Spatiality, in M. Wrathall (ed.), The Cambridge Companion to Heidegger's Being and Time. Cambridge University Press, 2013, pp. 129-144.
- (5) H. L. Dreyfus, ibid., p. 129.(上掲書、一四六頁。)
- (6) H. L. Dreyfus, ibid., pp. 131-133. (上掲書、一四九-一五○頁。
- (7) H. L. Dreyfus, ibid., pp. 135-136. (上掲書、一五二-一五四頁。 (8) D. R. Cerbone, ibid., p. 142.
- $(\boldsymbol{\circlearrowleft})\;\; \mathbf{D.}\; \mathbf{R.}\; \mathbf{Cerbone, ibid., p.}\; 142$

- (\(\mathbb{\text{\pi}}\)) D. R. Cerbone, ibid., pp. 134, 136-137.
- (11) H. L. Dreyfus, ibid., p.135. (上掲書、一五三-一五四頁。)
- (12)高井は、ハイデガーの空間論において「「ここ」にある身体」が特権視されていないことを、瑕疵ではなく、例えば、人(ロボッ うと「ここ」のロボットのアームを右方向に伸ばすといった、「特殊な空間把握にも妥当する柔軟な議論の構築を目指」すもので トの操作者)がカメラの映像を観ながら遠隔操作で人間が立ち入ることができない構造物の中にある「そこ」の瓦礫を撤去しよ

あると捉え、ハイデガー空間論の射程の広さを示唆している。高井寛「ハイデガーの空間論」、日本現象学会編『現象学年報』第

三十四号、二〇一八年、一三七-一四四頁。

(本研究は JSPS 科研費24K15891の助成を受けたものです。)

(山口県立大学社会福祉学部・准教授